

日本海海戦100周年記念事業1000人委員会主催
日本海海戦100周年記念歴史セミナー「世界を変えた日露戦争」

講演要旨

日露戦争時の新聞と読者

長山靖生 (評論家)

平成17(2005)年5月28日

パレスホテル (パレスビル3階会議室)

「日露戦争時の新聞と読者」という題で、お話をさせていただきますが、いまでも戦争報道というものは、かなり大きな位置を占めていまして、トップニュースになります。まして、自分の国が係わっている戦争は最大関心事になります。

比較的自由な報道

日露戦争は、日本が行なった戦争の中で、ジャーナリズムが最も自主的に、比較的自由に報道できた戦争だったと思います。

それ以前の日清戦争の場合ですと、やはり、まだ新聞の資本が充実していなかったり、写真技術が脆弱で、現場の写真がなかなか撮れなかったりということがありました。また、のちの太平洋戦争になりますと、いろいろ報道されましたけれども、完全に軍の統制の下に入って、たとえば作家などが戦地に行きましたが、彼らも文学報国会の形で、尉官待遇とか佐官待遇というように、軍から位や給与をもらって、軍統制下で執筆あるいは報道しました。

それに対して、日露戦争の場合は、各新聞社、雑誌社が従軍記者を出しますが、手弁当だった代わりに、軍のほうも細かいことはいわずに、比較的自由に行動をさせていました。

日露戦争といたしますと、社会学や歴史学のほうの表現と、文学のほうの表現では、いまでもはつきり落差があります。文学史の年表を見ますと、日露戦争の時期に「反戦文学興る」と書いてあります。「戦争文学興る」とは書いてありません。

社会学のほうで見ますと、「戦争雑誌相次ぐ創刊」という項目があります。博文館は、当時の雑誌のトップの『太陽』を出していましたが、開戦後は『日露戦争写真画報』を出したり、あるいは、田山花袋を派遣して『日露戦争実記』を出したりしますし、ヴィジュアル雑誌で有名だった『通俗画報』(東陽堂刊)は、臨時増刊を『征露図会』のタイトルで28冊刊行しています。

このように、戦争を報ずる雑誌がどんどん増えますが、また、戦争文学の一部として、現に戦地にいる兵隊さんが短歌であるとか、漢詩、あるいは俳句をつくって、直接、国内の新聞とか雑誌に投稿することも行なわれました。そういうものを通じて、国民が戦争を実感する。また、戦場と内地の間で情報やイメージが活発に交換されます。そういう意味で、戦争が報道されつつ戦争が行なわれていたといえます。

そういう意味で、報道というものが国民の意識に、どう影響するかということを考える上で、日露戦争は、新聞の意義についてのターニング・ポイントだったと思います。

そもそも新聞と日露戦争の係わりといたしますと、新聞は開戦以前から戦争の行方に影響を与えています。ロシアが南下政策を採り、満洲に居座って引きあげない。朝鮮半島にも進出しつつあるとの報道に接し、国民には、このまま経過すれば、満洲がロシアに取られてしまう、朝鮮も侵略され、やがては日本本土も危うくなるのではないかと、危機感が募ってきます。

そのような中で、夏目漱石を朝日に引っ張った

人として有名な『東京朝日新聞』主筆の池辺^{さんざん}三山は山縣有朋や伊藤博文に会って、彼らのロシア問題に関する意見を聞くだけではなく、ロシアとの開戦は避けられないとの持論を展開します。これに対して山縣が、「あなたがたがそのつもりなら、私たちも考えましょう」と答えています。

この場合は、新聞人が開戦を勧めた形になっていますが、もちろん、ロシアは大国ですから、もし戦争になったら勝てるのかという心配がありますから、当然、新聞の中には戦争を避けるべきだという非戦論を唱えるものもありました。

大新聞と小新聞

当時の新聞は、いまと違って公平な報道といわずに、正しい報道を標榜していました。「公平」と「正しい」との差とは、正しい報道というのは、自社が正しいと思う思想を前面に出す新聞経営をするということです。

明治前半期の新聞には、^{おお}大新聞と^こ小新聞という分け方がされていまして、大新聞というのは資本が大きいという意味ではなくて、政治的な主張、たとえば自由民権とか国権論とか、イデオロギーを前に出して、わが社はこういう主張でやっていくのだというのが大新聞で、これに対して、実際に起こった事件とか風俗的な記事を中心に、さらには家庭欄を充実させるとかというのが小新聞です。

しかし、明治30年代に入りますと、新聞そのものが転換期に入ります。つまり、特殊な政治的な主張にだけ関心がある不平士族などが多かった明治初期とは変わって、教育が普及して、みんなが新聞を読めるようになる。そうしますと、政治的主張を前面に出してくる大新聞よりも、一般的なニュースが読みたいという読者層が増えてきますし、情報の正確さが求められるようになってきます。

まだ読者側に判断力がありませんから、イデオロギー的に正しいということよりも、事実は何なのかという読み方が強くなる傾向にありました。そうなってくると、小新聞系の新聞のほうが、だんだん優勢になってくる。そして、情報を正確に伝える必要から記者をたくさん雇うようになる。情報チェックができるというのが新聞にとって非常に大事になってきました。

明治34、35年ごろは、どちらかというと、ゴシップ的な記事を多く載せていた『^{よろずちやうほう}萬朝報』とか『^{にろく}二六新報』だとか、そういう新聞が東京でトップを争っていました。

また、いまでも『秋田魁新報』とか『静岡新聞』などの地方紙があり、現在は何県でも朝日とか読売がトップで、地方紙は3番目、4番目の部数ですが、当時は地方では地方紙がトップでした。つまり、生活に密着した情報を伝えてくれる新聞という意味で、地方紙の地位が高かったのですけれども、日露戦争は新聞界に大きな変化をもたらしました。戦争のニュースは国民全部が興味を持ち、どの地方の人も読みたいわけですから、戦争についての正確で速い情報を提供する新聞が部数を伸ばします

その上、従軍記者は手弁当で、資本がないと従軍記者を出せませんから、地方紙は、たくさん従軍記者を出している中央紙にだんだん押されてきます。

七博士事件

新聞が日露戦争開戦に大きな影響を与えた七博士事件というのがございます。開戦前年の6月10日に、東京帝大の^{とみずひろんど}戸水寛人教授、この方はローマ法の専門家ですが、この戸水教授以下、7人の法学博士が、政府に対してロシアとの開戦やむなし、開戦するしかないという意見書を提出します。この建白書は権威ある学者の意見として政府に提出されたもので、一般国民に知らせるものではなかったのですが、6月21日付の『東京日日新聞』が、戸水教授らが政府に建白書を出したと報道します。

それは、「(前略)外交問題に関して、熱心なる運動を始め、一面、政府当局者に向かって建議書を提出(中略)諸氏は、今日を以て露国と開戦すべき好時機なりと做し、もしこの機会を逸せば、また露と戦ふの日なしと云ふにあり。しかして市井乱を好むの徒、皆諸氏の説に雷同して、その言動を喜ぶものの如し」というもので、七博士の建白書が民心を煽るものだと批判的に書いています。

これに対し、7人の博士側は、ほかの新聞社を招きまして建白書の全文を発表しました。そして、6月24日付の各紙が、これを一斉に載せました。

それまで、国民の間には主戦論、非戦論それぞれに意見があったのですが、各紙に載った七博士の意見に接すると、世論は一気に主戦論に傾きました。

国民の気持ちが一斉に主戦論に傾きますと、非戦論を打ち出していた新聞は、どんどん売れなくなってきます。そして、それまでも主戦論を盛んに主張していた「朝日新聞」は、一挙に部数を伸ばし、日露戦争のお蔭で「朝日新聞」はあのようになくなったといわれるようになりました。

そのときに、最後まで非戦論の立場をとっていたのが『萬朝報』です。『萬朝報』は直接的に非戦論を唱えていたわけではなく、梁山泊的なところのある新聞社で、一人一人の記者が、自分の主張を書き、社論の統一ができていませんでした。社内の主戦派の記者は主戦の記事を書く、非戦派の記者は非戦の記事を展開し、紙面で論争する形でした。

しかし非戦の記事が読者に受けなくなって、社論を主戦論で統一することになり、非戦派の幸徳秋水、内村鑑三らの記者が辞職し、彼らは、日露戦争が始まったあと、『平民新聞』を発足させています。

従軍記者

先ほど申し上げた「朝日」の池辺三山は、自分が政府要路に開戦を焚きつけていたこともあり、また政府要人に密着していたこともあり、開戦に向かう情報をいちばん持っていましたので、開戦前年の10月頃には、朝日新聞は福岡と広島に電話を敷設し、開戦情報あるいは大陸からの情報が入ってくると、即座に本社に情報を送れるように準備しました。また、佐世保に記者を待機させ、開戦になったら出港する軍艦に乗せてもらおうと用意しています。

しかし実際には、開戦になりますと、海軍は、一切、従軍記者を同行させない方針を明らかにします。その表向きの理由は、軍艦ですから記者の生命の保証ができないからということでした。陸軍のほうは、開戦直後の2月10日に、「従軍記者心得」を出しました。その中で、手弁当であることだとか、前線では命令に服してもらおうとか、各社一軍1名であるとかが明示されていました。

陸軍は第一軍から第四軍までの四軍編成でしたから、その各軍に1新聞社から1名のみを従軍

させるというのですが、実際に従軍記者を出せる新聞社は少なく、「朝日」とか、「大阪毎日」は、他社の枠を借りて、一軍に2名あるいは3名、たとえば記者とカメラマンという形で従軍を願い出たりして、軍のほうもこれを黙認した形で受け入れました。

因みに日露戦争では、作家が随分従軍します。いちばん有名なのは田山花袋だろうと思いますが、彼は博文館の記者として従軍します。そのほかに、「東京朝日」は第三軍に半井桃水なからいとうすいを出しています。半井桃水というのは、いまはあまり読まれなくなりましたが、割りと早い時期に朝鮮に行って、紀行的な文章を書いたり、朝鮮を舞台にしたラブストーリーを書いたりしました。いまの文学史では、彼は、5千円札になっている樋口一葉の師匠とか恋人というかとして有名だと思えます。そのほか、岡本綺堂も『東京日日新聞』の記者として従軍します。

こういった人たちが、戦争というものをどう見たか、どう伝えたかということは、非常に興味深いところです。彼らが見たものをリアルタイムで書き送り、それが数日後には紙面に載ります。たとえば、田山花袋は自然主義の人で、自然主義、写実主義というのは、反戦的と思われがちですが、彼は「この戦争を見る幸運」と書いて、やはり高揚しています。

彼は第二軍に従軍し、第二軍には軍医として森鷗外がいましたが、南山の戦いのあとで、夕方、ロシア軍が火をつけながら退却して行くのですが、ロシア軍の弾薬庫が爆発して火を吹くのを見て、後ろから森鷗外に「実に、君、好い処を見たね」と声をかけられ、「実に壮観でした」と花袋が答えて、それをそのまま博文館の雑誌に書き送っています。戦争というものは、思想を超えるのだなと思わせる場面です。

戦争美談の登場

新聞は、起こったことを正確に書こうとしますが、第1面に、こういうことが起こったと書きますと、第2面、第3面には何を書くかというのが問題になります。戦争が始まって1、2ヵ月しますと、大きなスペースを占めてくるのが美談報道です。

最初は戦死報道で、こういう人が戦死した、ど

ここの戦いで亡くなった。この人はどこの生まれで、こういうように勇敢に戦って亡くなったという戦死報道が 2、3 面の中心でした。そのような中で、「大阪朝日」でしたか、遺族の訪問ということを行います。故人はどういう人でしたかから始まって、どのような感想をお持ちですかという、聞きにくいことを聞くわけです。それに対して健気な答えがあると、それが美談として伝えられました。

それが非常に人気を呼びまして、人気を呼ぶというのも変ですけども、遺族の中には、やはり、自分の子供が、あるいは夫が、立派に戦死したことを知ってもらいたいという気持ちが出てくるようで、これも「大阪朝日」だったと思いますが、広告料を払うから、自分の子供が戦死したことを大きく取り上げてくれという要求があったということを行っています。

その新聞の書き方が振るってしまっていて、そのような要求がありましたが、これはもちろん広告ではなくて、記事として書かせていただいておりますと報道します。そうしますと、それはそれで、今度は新聞のほうの一つの美談になるわけです。

日露戦争のときの戦争美談というのは、かなり幅が広くて、単に勇敢に亡くなりましたというのではなくて、悲しみを込めたものもあれば、ロシアの兵隊と日本の兵隊を分け隔てなく看護したとか、日本の兵隊が死にかかっているロシア兵を抱き起こし、自分の水筒から末期の水を飲ませようとすると、ロシア兵から、自分はまだ駄目だからといって、肌身につけていた奥さんと子供の写真が入ったメダルと手紙を、ロシアに送ってくれと頼まれたという美談も載っています。

『国民新聞』の明治 37 年 5 月 10 日の紙面に、そのメダルを託された話が出ています。死んだロシア兵から預った郵便代よりも実際にロシアへ送った郵便代のほうが高かったけれども、その差額は頼まれた日本兵が負担したという話まで出ています。

この話は、別な形でも使われています。『平民新聞』に関係していた詩人が、このストーリーを「写し絵」というタイトルの詩にして「哀れや、残れる妻と子は モスクア辺りの夕まぐれ……」というように、戦場で夫が戦死したのを知らないで、ロシアにいる妻と子は、無事を願いながら生きているという意味の反戦詩というか、厭戦詩に

しています。

一つの事柄が、英雄美談としても伝えられるし、また、印象的な悲しい物語にもなる。表現の仕方によって、一つの事実を異なったものとして見せる好例です。

国際法とロシア語学習書の出版

日露戦争のときは、戦争が始まってしまいますと新聞はほとんど全部主戦論になりますが、主戦論の中にも幅があって、徹底的にやっつけてしまえというもの、仕方がないから戦争をやるのだというもの、どこで幕を引こうかという冷静なものもあるわけです。日露戦争のときは、統制されていなかったもので、報道に幅があったといえます。

それから、戦争が始まった直後の各紙の社説にほぼ必ずあったのが、この戦争を通じて、日本は国際的に評価を受けるから、決して、ロシア、特にロシア王室を徒に侮辱するようなことは控えるようにという主張です。たとえば、日露戦争報道のために創刊され戦争中に最も読まれた雑誌『日露戦争実記』の創刊号は、明治天皇とニコライ二世の写真を同じ大きさに対等に並べて載せ、両方に陛下の尊称が付いています。戦いをする両方の国家の元首を対等に並べる配慮をしています。

書籍の出版にも興味深い現象がありました。戦争が始まった明治 37 年 2 月と翌月の 3 月には、ばらばらと数十冊の戦時国際法の本が出版あるいは再版されます。また、ロシア語の学習書やロシア文学の本も出版されます。太平洋戦争のときは英語は敵性語として排斥されますが、日露戦争のときは、国民の側に戦時国際法を勉強しようとか、ロシア語を憶えようとかという気運が高まりました。

戦争を始めるに当たって、国民の側に、このような冷静な面があったことは、戦争を遂行するための国力増強に繋がったのではないか。新聞あるいは出版のありようの中から、このようなことも窺えます。

ご静聴ありがとうございました。

(文責・中島 洋)